リーチがかかると、当たるのを恐がって牌を捨てるのを躊躇して時間がかかる人がいますが、確率的には当たる牌の数は少ないのですから、これは当たるか当たらないかの問題ではなく、行くか下りるかの決断の問題なのです。

たとえば萬子の待ちらしき手でリーチがかかってきたとき、３面待ちとして、萬子を振って当たるのは９種類のうちの３種類です。目をつむって振っても当たるのは３回に１回です。

自分がいい手のときはリーチなんて、恐れることはないのです。むしろ何でも振ってくれるわけですから、大歓迎です。

とは言え、相手の手が大きいときに勝負していくのは、得策ではありません。相手の手の大きさをどうやって推測するのか、そのためにも役を知っておく必要があります。

また、確率的には、１ 回だけでも、その１ 回目が一発目にくることもありうるわけですから、その覚悟はしておく必要があります。